



戦後を醒めず

島田修三

島田修三

新
歌人群像

棄てられし一兵

昭和二十(一九四五)年四月、島田修三は江田島の海軍兵学校に入校する。満年齢で十六歳。つまり島田の海兵時代は敗戦までわずか四か月にすぎなかった。とはいえ、戦局悪化の一方をたどる当時、十六歳の少年が海兵を志願したのである。そこには今日のわれわれの想像を絶する一途な思いがあったと考えなければならぬ。祖国のために命を捧げる覚悟が秘められていたことはまちがいないのである。

再びは帰らぬ家を見放くれば母は小さく
佇ちてゐ給ふ
『花火の星』

連作叙事詩「孤軍行」と題された五十八首の一連中の歌である。作中主体は幕末の戊辰戦争において官軍に抵抗して滅びた会津藩白虎隊の少年なのだが、「再びは帰らぬ家」を後にしたのは十六歳の島田修三でもあったはずである。一首に流れる切ない母恋いの情は海兵入校に出立した日、島田少年の胸裏にのぞから湧いたものであったろう。しかし少年兵は敵と戦うことなく生還した。

棄てられし一兵として国を棄て夏の焦
土を帰りしかな
『冬音』

昭和四十四年、作者四十一歳のときの一首である。「棄てられし一兵」という表現には重たいものがある。彼を棄てたのは、命を捧げようと覚悟した「国」なのであった。その「国」はブザマな姿をさらして敗れ、少年兵の一途な思いを遂げさせなかった。「棄てられし一兵」にはそういう意味合いがこもっているものと考えられる。少年の一途な思いは宙吊りのまま、戦後四半世紀を島田の内部にまなましく生きつづけたのである。

武器を捨て今日を生き得しにわが裡の
兵士のころ折々に動く
『春夏』
アジア史に人間の罪誌しつづわれが裡
なる兵士老いたり

水漬きたる軍装おもく泳ぐ夢いくたび
か醒む戦後を醒めず
『渚の日々』
敗戦のうちに安吾の言ひしごと墮ち墮ち
ちゆきていま在るわれら
水漬きつつ死にたる兄よ死なざりし我
は戦後の海に佇ちるる

『春夏』の二首は三十年代、『渚の日々』の三

首は四十代から五十代にさしかかるころの歌である。宙吊りになったまま生きる少年兵の思いはこのように深い陰影と痛ましい屈折を見せながら、新たに新聞記者として戦後を生きる島田から去る事はなかった。五首から読みとれるのはこうである。祖国の戦争はアジアへの罪深い侵略でもあった。しかし、その祖国のために一兵として命を捧げんとした思いは戦後も生傷のように疼き、中途半端に生きながらえた自分が墮落していると思えぬことがある、というのだ。

島田には四歳年上の兄がいたが、将校として乗艦する駆逐艦「敷浪」が南シナ海で米軍の潜水艦に雷撃され撃沈、二十一歳で戦死した。五首目にあるように、その兄に対する負い目もまた島田の陰影と屈折をたやすくは消すことがなかったようである。

記者として父として

海兵から帰った島田は旧制静岡高等学校文科に入学、昭和二十五年に東京大学文学部社会学科に進む。戦前の軍人志望から一転してジャーナリストへの道をこころざした。昭和二十八年に読売新聞社に入社し、五十四年三月に途中退職するまでの二十五年あまりを記

者として生きたのであった。

いわし雲視野に余りて信じをりアジ
ア・アラブの知恵のふかさを『朝の階段』
わがうちの群衆の部分吊革にすがりて
シンバルの一打を待てり 『花火の星』
悼まれてゐるは死者のみ理髪店の鏡に
くまなく映るわが首

ソシミ村ミライ部落に一家族がこの世
の涯に見たるにんげん 『冬音』
金芝河の言へる五賊に加へんか無力に
老いゆく記者の一人を 『渚の日々』



第2回「コスモス」全国大会の折のスナップ。後列中央は修二。前列右は宮柊二。(1954年)

島田修二

新 歌 人 群 像



1964年、日本歌人クラブ総会で『花火の星』が推薦歌集賞を得る。
左から1人おいて葛原妙子、修二、鹿兒島寿蔵。

島田修二は現代短歌の第一線で注目すべき作品を詠みつづけたが、その作歌活動のペースのひとつに掲出歌に見られるような時代状況を正面から題材に取りこむ、新聞記者ならではの幅広い目くぼりと知的に開かれた認識があったはずである。いずれの歌にも優れたジャーナリストの冷静でヒューマンな良識が働いている。それは六十年安保闘争を題材とした二、三首目やベトナム戦における非戦闘員の大量虐殺事件を題材とした四首目などに端的にうかがわれよう。

こうした時代状況からストレートに取材し

た歌群をさらに掘りさげた位相から、次のような深い人間観や時代認識を底にしずめる佳作が生まれたと見ることができよう。

ただ一度生れ来しなり「さくらさくら」
歌ふベラフォンテも我も悲しき

『花火の星』

かの戦後よみがへりぬと思ふまで雪ふ
かき街につづく歩行者

『冬音』

やすやすと制度に従ふしむらをしぐ
れに打たせ他人の如し

『渚の日々』

島田には、こうした時代状況と切りむすぶ歌のほかには、家庭人としての深々とした私情を吐露する歌が数多く残されている。とりわけ身体に障害を負って誕生した息子を題材とした歌群には、父としての島田修二の姿がきわやかに刻印されることとなった。

怵へつつ声あげぬ子は係累を隔てて病
めりギプスの中に

『花火の星』

或る星を見つむる思ひ足病みて童仲間
に紛らひゆかぬ子

病みしゆゑ意地強き子に関のこゑあぐ
る日あらば聞きて死なんか

『青夏』

不自由の歩行に力ふりしぼる少年とる
てこころ澄みゆく

『冬音』

男坂降りつつわれは子を思ひ父といふ
ものはかなきに似る

『渚の日々』

給料を得る青年となりけるかのわれ
らが子がかく生ひ長けて

『東国黄昏』

一首目から六首目の間にはおよそ二十年の歳月が流れている。幼児期から職を得て社会に出るまでの長かつたであろう歳月である。障害を負った子どもをもつ文学者に大江健三郎がいるが、障害児を時代を読み解く文学的コードにまで抽象化しようとした大江とは異なり、島田修二はもっぱら父として子どもにそそぐ「素心」(『青夏』抜文)を歌いつづけた。一、二首目を含む「ギプスと三輪車」の一連は、短歌の私性を激しく否定してやまぬ塚本邦雄をして「ほとんどは語じてゐる。そして今でも口遊みながらさしくむ思ひである」(『星夜の辞 島田修二論』『短歌』昭

47・10)と書かした。わずか六首の抄出だが、これらの二十年間の作品には父として渾身の情愛を障害児にそそぎながら生きた男の姿が鮮明に描かれているだろう。障害児との歳月に浮き沈みする

折々の感情——憤りに似た悲哀や無力感、孤独感、無骨な慈愛、歓びといった感情や、子どもの成長にともなう移ろう心境が骨格正しい端正な文体で歌いとられ、現代短歌屈指の悲歌として、忘れがたい印象をわれわれの心に刻んだのである。

復帰とユーモア

五十歳のときに新聞社を退職して以降、島田は定職というものを一切もたなかった。ひとりの歌よみとしての生に徹しようとしたようだ。宮柁二も四十八歳のときに長く勤務した製鉄会社を途中退職したが、島田の選択



「コスモス」の編集会議。左から2人目が修二。奥で眼鏡をかけているのが宮柁二。(1965年)

も師を意識したものだっただかもしれない。

何をしてゐるのだといふこゑのする

歌を作つてゐると答ふる 『渚の日々』

歌と真向かうシンプルな生活を五十歳の島田修二は選んだのであったが、新聞社というリアルそのものの時代社会に直結する組織と切れたことにより歌境は微妙に変わっていく。例えば、北原白秋などに通ずる浪漫的な抒情性は本来の持ち味のひとつであったが、そこに次の歌に見られるような自在な伸びやかさが添ってくるようになった。

風となり光となりて若ものが春のあし
たの坂くだり来る 『春秋帖』

奔りゆく馬うつくしく立ちどまりなほ
うつくしく若ければ馬 『草木国土』

さらに、例の宙吊りになつたまま生きる少年兵の思いが静かに風化していき、風化の果てに、戦後を生きる島田の歌を長く支配した深い陰影と痛ましい屈折を消していく。

日のしづむ窓に寄りつつなつかしむ昭
和時代のわきて戦前 『行路』

軍に行く一途なりにし少年の日の写真
を笑ひ下され

ためらはず回顧の歌を詠むべしと軍を
憶へば心融けゆく

他にいかなる生き方ありし「カイヘイ
ガフカク」昭和十九年秋

六十代半ばの島田の歌である。こういうストリートな戦前への懐旧が吐露されるようになる。いわば戦前への復帰だが、ここでもやく宙吊りになつた「棄てられし一兵」は魂の安息の場を得たといえるのかもしれない。それと同時に、これも生来の資質であつたはずのユーモアが歌ににじむようになる。

罵詈雑言ありつたけ吐きてつまらなき
にんげんだから原野に入る

毎日の食事どうしてゐるかとか大事な
ことだが答へたくない

「短歌往来」(ながらみ書房)平成十六年九月号掲載の「根釧微吟」からの二首。開き直つたような、ぶっきらぼうな歌いぶりに巧みなる洪いユーモアがにじむ。新しい歌境を見せはじめていたのである。しかし、同年九月十二日、原稿執筆中に急逝、奇しくも南シナ海で戦死した兄陽一の命日であつた。

(しまだ・しゅうぞう「まひる野」編集委員)